

大正大学附属図書館所蔵『いそざき(磯崎)』をめぐる一考察

渡 辺 麻里子

一、はじめに

大正大学附属図書館には、『いそざき(磯崎)』の絵巻(上中下三巻)が所蔵されている(以下、大正本『いそざき』と表記する)。大正本の存在はこれまで学界にあまり知られておらず、研究上、看過されてきた。しかしながら貴重な伝本と思われるため、ここに紹介し、その意義を検討するものである。

『いそざき』は、成立は天正以後で、作者は未詳の物語とされている。内容は次のような話である。

下野国日光山の磯崎殿という侍は、ある時、本領安堵のために鎌倉に行った。妻はこの留守中、夫の無事を祈念しつつ待っていた。戻ってきた夫は、鎌倉から新しい妻を連れて来て、別宅を造り新妻を住ませた。気のおさまらない本妻は、再び鎌倉に行った夫の不在中に、新妻を嚇してみようと思ひ立ち、猿樂師から鬼の面や杖などを借りて出かけていった。新妻の家に忍び込み、中の様子をのぞいた本妻は、新妻の美しさや夫への思いを知る。こみ上げる思いが止められなくなった本妻は、とうとう部屋に入って、新妻を打ち殺してしまった。

さて本妻が家に戻って鬼の面を取ろうとすると、なぜかどうしても取れず、手に持った杖も離れない。このよ

うな姿を人に見られては恥ずかしいと、家を出て後ろの山に隠れた。本妻には、日光山の稚児であり、学匠である息子がいた。息子は母の事を知って山中に探しに行く。母を探し当てた息子は、母をさとし、黙然として坐すことを勧めた。その言葉に従うと、不思議なことに母の顔から鬼の面も手にした杖もはずれて前に落ちた。自分の罪を悔いた母は出家し、諸国行脚に出る。夫の磯崎殿も、新妻と本妻を失った我が身を懺悔して出家した。

『いそぎ』は、嫉妬のあまり新妻を殺してしまふ妬婦譚の一つとして著名な物語である。古くから研究もなされており、管見の限り、最も早く取り上げたのは高野辰之氏であった。高野氏は、昭和八年（一九三三）の論考で、「磯崎は近古小説中、宗教味の濃やかなものとして注目すべき作の一つである」と述べている。

『いそぎ』の激烈な内容は、研究上様々に関心を集め、女の妄執の話として『道明寺縁起』や『鉄輪』などと関連して論じられたり、後妻打ち、取れなくなる鬼面などの観点からも注目され、日本文学にとどまらず、能楽や民俗学などの方面からも、多角的に論じられてきた。

また伝本研究も早くから行われてきた。海外にある絵巻として『在外奈良絵本』に取り上げられ、絵巻・奈良絵本・版本など、これまで十数本の伝本が紹介され、詞書や挿絵の両面から詳細に研究されてきたのである。伝本研究の結果、冊子本と絵巻とある中で、原型に絵巻を想定し、現存する唯一の絵巻であるデンバー美術館所蔵本に注目する説や、デンバー本の検討から、デンバー本のもとに冊子本を想定する説などが出されている。このように諸伝本の整理検討はかなり詳しくなされてきたが、この度、大正大学附属図書館が所蔵する伝本が見つかったのである。

大正大学附属図書館『いそぎ』の絵巻・上中下三巻は、これまであまり研究の俎上に上がらなかつた。臨川書店の『日本書古書目録』に掲載された折に岩崎雅彦氏が着目し、目録の記載情報を元に、「専門絵師の手になると思われる新出の江戸前期の絵巻」と言及しているのが、唯一の指摘であろう。その後、大正大学附属図書館の所蔵となつて以降、現在に至るまで、特段に取り上げられることはなかつたようである。

大正本は、上中下の三巻が揃い、絵も文字も美麗な絵巻である。絵巻はこれまでデンバー本の一本しか確認されていなかったため、完存する絵巻として貴重な伝本である。また内容を精査すると、デンバー本に欠落する、息子が母を説く場面も有している。本文も絵も、他伝本と異なる点が多く、様々な特徴が確認できる。これまで伝本間で、本文には大きな相違はないとされていたが、大正本は、上巻には細かな異同が、中巻・下巻には大きな異同が認められ、『いそぎ』という作品を考える上で、重要な視座を与える伝本だと考えられる。

そこで本稿では、大正本『いそぎ』絵巻三巻を紹介し、その意義を検討する。また大正本の分析によって、室町物語『いそぎ』の意義と可能性を論じていきたい。

二、大正大学附属図書館蔵『いそぎ』について

大正大学附属図書館蔵『いそぎ』は卷子本で、上中下の三巻からなる。まず、書誌情報を以下に示す。

- ・ 形態 絵巻三巻（上・中・下）
- ・ 法量 上巻：紙高、三五・七糎×全長六八二・六糎。（後補の部分を除くと、五九六・九糎）
中巻：紙高、三五・七糎×全長五四四・糎。（後補の部分ナシ）
下巻：紙高、三五・七糎×全長七六七・〇糎。（後補の部分を除くと、四二八・七糎）
- ・ 表紙 茶色布地に草花紋、葉紋繋ぎの中に鳥・亀の文様。縦三五・七×横三四・一糎。
- ・ 見返 金色布目地。縦三五・七×横三四・〇糎。
- ・ 料紙 斐紙（薄茶色）。詞書の部分には、各紙、山、木、草、葉、紅葉、扇子などの異なる風景や文様を薄茶色で描いた絵図柄を全面に散らす

・題箋 縦一四・六×横二・五糎。

・外題 上巻「いそさき^上」、中巻「いそさき^中」、下巻「いそさき^下」

・内題 ナシ

・紙数 上巻 一四紙、中巻 二〇紙、下巻 一二紙

・各紙寸法 縦三五・七糎、横は各紙以下の通り。

・上巻 「第一紙」四九・八(十二・八)、「第二紙」五〇・四(十二・八)、「第三紙」五〇・八(十二・

八)、「第四紙」五〇・八、「第五紙」四九・六、「第六紙」五〇・〇、「第七紙」五〇・四、「第八

紙」四九・九、「第九紙」二三・四、「第一〇紙」五〇・六、「第一一紙」四九・九、「第一二紙」一

九・一、「第一三紙」四三・八、「第一四紙」八五・七糎

合計、六八二・六糎

・中巻 「第一紙」五〇・五(十二・八)、「第二紙」五〇・一(十二・八)、「第三紙」五〇・六(十二・

八)、「第四紙」四九・三、「第五紙」五〇・六、「第六紙」二五・七、「第七紙」四五・三、「第八

紙」五〇・四、「第九紙」四七・〇、「第一〇紙」二五・六、「第一一紙」四七・六、「第一二紙」四

八・三、「第一三紙」五〇・三、「第一四紙」二九・六、「第一五紙」四八・一、「第一六紙」二四・

三、「第一七紙」四九・三、「第一八紙」四八・三、「第一九紙」一四・五、「第二〇紙」五・〇糎

合計、五四四・一糎

・下巻 「第一紙」五〇・三(十二・四)、「第二紙」五〇・五(十二・四)、「第三紙」五〇・五、「第四紙」

五〇・一、「第五紙」四九・八、「第六紙」五〇・三、「第七紙」五〇・〇、「第八紙」二七・五、「第

九紙」四九・七、「第一〇紙」一七三・八、「第一一紙」一六四・五糎

合計、七六七・〇糎

・構成

・上巻

〔第一紙〕絵1、〔第二紙〕絵2、〔第三紙〕絵3、〔第四紙〕絵4、〔第五・六紙〕詞書1（一八十一六行）、〔第七・九紙〕詞書2（一八十一九十八行）、〔第一〇・一二紙〕詞書3（一八十一九十五行）、〔第一三紙〕詞書4（一〇行）、〔第一四紙〕後補の白紙

・中巻

〔第一紙〕絵5、〔第二紙〕絵6、〔第三紙〕絵7、〔第四・六紙〕詞書5（二三十一九十八行）、〔第七・一〇紙〕詞書6（二六十一九十一八十八行）、〔第一一・一二紙〕詞書7（二七行十二〇行）、〔第一三・一六紙〕詞書8（一八十一一十八十七行）、〔第一七・一九紙〕詞書9（一〇十一四十七行）、〔第二〇紙〕後補の白紙

・下巻

〔第一紙〕絵8、〔第二紙〕絵9、〔第三紙〕絵10、〔第四・五紙〕詞書10（二四十一七行）、〔第六・九紙〕詞書11（一八十一九十九十一行）、〔第一〇・一一紙〕後補の白紙

・制作年代 江戸前期か（年記不載）

・補修等 現在の装丁は、原装から少なくとも一度装丁され直した後に、近代に再度補修したものである。軸・表紙・紐は、近代の修補によるものと考えられる。紙や糊の状態から、各巻の絵をまとめた時と、表紙・軸・紐を付け替えた補修は別の時に行われたものと考えられる。料紙は、厚い斐紙で、各紙には金色で草木・水辺などの絵を散ら書きして配した、豪華なものである。

大正大学附属図書館蔵『いそぎ』は卷子本三巻（上・中・下）である。絵巻の一般的な形式としては、詞書があり、次にその詞書に対応する絵が配され、また次の詞書とその内容を描いた絵2、次に詞書3と絵3と続いていく。それに対して、大正本の形式は特異で、各巻ともに、絵のみが巻の最初にまとめられ、詞書がその後にもまとめて配されている。例えば、上巻の場合、巻の頭に絵1・4の四面がつけられて置かれ、その後、詞書1・4が配されている。

のである。絵は、上巻に四面、中巻に三面、下巻の三面の合計一〇面がある。

三巻ともに、絵が巻のはじめにまとめて置かれていたのだが、その絵は、料紙をただつないでいるのではなく、一枚の絵ごとに上下左右に金色無地の紙を額縁のように貼って仕立てている。書誌情報の各紙寸法で、上巻・中巻の絵の部分に（十二・八糎）、下巻に（十二・四糎）として記したのは、絵と絵の間に金色無地の縁が設けられている部分である。各巻ともに、最後の絵と、最初にくる詞書の料紙との間に、この金色の縁（継ぎ目）はない。

絵の顔料は、いわゆる奈良絵の顔料ではなく、大和絵を思わせるものである。絵師の名前は不明ながら、絵は端麗であり、岩崎氏が指摘したように、力量のある絵師の手によるものと思われる。

詞書は、字高が約三〇・五糎、一行は約二〇字程度で記され、詞書の最終の数字は、散らし書きとなつている。筆者についての記載は本書にはなく、徴証もない。美しい筆致であるものの、その筆者は未詳である。

大正本の現装に見る特徴としては、まず何より、この絵と詞書の配置が挙げられる。絵を卷子本の前半にまとめ、金紙で縁取りをして囲み、巻頭の絵だけを続けて鑑賞できるように構成している。縁で囲んで配列する絵の配置の仕方は、絵伝や絵解きで用いるしつらいに思える。文字を見ず、絵だけを鑑賞したり、絵のみを使った絵解きをする目的が考えられる。

絵だけが巻頭にまとめられた現状のような形式は、糊や料紙の状態から考えると、制作時当初からのものとは思えない。上中下巻ともに、詞書と絵の内容が対応することから、もともとは、巻一の場合、詞書1の後に絵1、詞書2の後に絵2、詞書3の後に絵3、詞書4の後に絵4と、一般的な絵巻の構成をしていたものを、後に、現状のような配列に仕立て直したものと推測される。さらにまた後に、裏打補修などの修理を行い、軸や表紙を作り直して、現在の状態に至っていると考えている。冊子本を卷子本に直したものは考えにくい。

詞書の内容は、『いそざき』の諸伝本と比して大きく差異がある。巻上などは近似するが、中巻後半から下巻にかけて、後半になると大きく違いのある箇所が見られる。大正本は絵もまた特徴的である。これらの点については、後述する。

三、大正大学附属図書館所蔵『いそぞき』の諸伝本間における位置づけ

これまでの研究では、大正本以外、現存が確認される十数本の全ての伝本について分析検討がなされてきた。⁸⁾ 先行研究で示された伝本の分類は以下の通りである。

◎伝本の分類

(一) デンバー絵巻系

(イ)・デンバー美術館所蔵(室町末) 絵巻 大二軸(『在外奈良絵本』などに所収)⁹⁾

・慶應大学所蔵(江戸初期)(横山重氏旧蔵) 奈良絵本 横一冊

『影印室町物語集成』四、『室町時代物語大成』補遺一、

『新編日本古典文学大系』などに所収¹⁰⁾

・中野莊次氏 奈良絵本(挿絵欠) 横一冊

(ロ) 東京大学国文学研究室(高野辰之旧蔵本)(江戸初) 奈良絵本 横二冊

『岩波文庫』所収、『国文学踏査』二に解説)

(二) 版本系

(イ)・寛文七年松会刊絵入大本(慶応大学図書館蔵赤木文庫旧蔵) 二巻

『室町時代物語集』四に所収)

・京都大学国文学研究室 昭和十二年写本 二冊

・慶応大学図書館蔵赤木文庫旧蔵(江戸初期) 奈良絵本 横大二冊

『室町時代物語大成』二に翻刻、『太陽古典と絵巻シリーズ お伽草子』に全図が所収)

- ・東京大学国文学研究室所蔵 奈良絵本 半二帖
- (口)・天理大学附属天理図書館所蔵 奈良絵本 横二冊

(昭和十一年吉永孝雄謄写版、解題のみ『室町時代物語集』四にあり)

- ・國學院大学図書館所蔵 奈良絵本 二帖
- ・小野幸氏蔵 奈良絵本 横二冊
- ・個人蔵 奈良絵本 横二冊
- ・個人蔵 奈良絵本 横一冊^①
- ・石川透氏蔵^②

(三) 大正本系

- ・大正大学附属図書館蔵 絵巻 大三卷

先行研究をまとめると、以上のように大きく、デンバー美術館所蔵のデンバー絵巻系と、寛文七年に版行された版本系に大別され、さらに細かく分けられているが、いずれも本文に大きな差異はないとされている。しかしながら大本は、これらの諸伝本と本文や絵に大きな違いがあるため、第三の系統を想定して別に立てておきたい。

それでは、具体的に本文を他伝本と比較してみる。「表一」は、大正本『いそざき』の詞書1・冒頭の部分を、他本と比較してみたものである。

〔表一〕大正本『いそぎき』と他伝本との比較（上巻・詞書一）〔稿末・写真一〕

*対校 (テ) ……デンバー本、(慶) ……慶應大学本、(刊) ……寛文七年松会刊絵入本¹³⁾

それ、こんしやうは夢のうちのゆめ、たれか百年のよはひをたもたん。はんしはみなむなし。いづれかしやうちうのおもひをなさん。松は干とせをふるといへとも、つみにくつるときは、きん花一日の栄にはしかし。はなももみちも一さかり、風ふかぬまのいのちなるに、なにはのこと、よしあしの、まちかきほとに、とはれねは、人のつらさは、身のうきこと、おもひなせにくみねたみ給ふ事、あさましき御事なり。されは下つけのくに、日光山のふもとに、いそぎ殿とて、かくれなきさふらひ一人ありけるか、よりどもの御とき、ほんりやうさういして、一兩年ありけり。あんとのために、さいかまくらにありけるか、るすの女はう、よろつといとなみをし侍りける。あるときはかゝみをしるなし、いしやうをこしらへてのほせ、その家の神仏に、今一度ほんりやうにあんとさせてたひたまへと、あけ暮きせいしけるによつて、やかてほんりやうにあんとして、下野にそくたりける。おとこのこゝろのつたなきは、別の女房をつれてくたり、ほりよりそとに、

こんしやう…一しやう (テ・慶)

よしあしの…あしかきの (テ・慶・刊)

つらさは…つらさか (刊)、つらきか (テ・慶)

うきこと…うきと (テ・慶・刊)、ねたみ給ふ…ねたむ (テ・慶)

かくれなき…ナシ (テ・慶・刊)

さいかまくらにありけるか…さいかまくらしけり (テ・慶・刊)、よろつ…よろつ (刊)、し侍りける…し (テ・慶・刊)、しろなし…しろかへ (テ・慶・刊)

こしらへて…こしらへなとして (テ・慶)

神仏…神や仏 (テ・慶)、ほんりやうに…本りやう (テ・慶・刊)、たひたまへ…給はれ (刊)

よつて…よつてやらん (テ・慶)、ほんりやうに…本りやう (テ・慶・刊)、下野にそ…下野に (テ・慶・刊)、くたりける…くたりけるに (テ・慶)、ほりより…ほり (テ・慶)

家づくり、あたらし殿と名つけけり。

(デンバー本・絵1)

*家の女房おもふやう、

あらはら立や

我よろつの

いとなみをして在鎌倉を

とつけけるかひもなく、

かゝるふるまひ

なさけな

きふるまひかなと、

明暮うらみ

かこちける。*

家…家を(デ・慶)、名つけけり…なつけをきけり(デ・慶)

はら立や…はらたちの事や(デ・慶)

とつけける…とけたる(デ・慶)

ふるまひ…ふるまひの(デ・慶)

ふるまひかな…事よ(デ・慶・刊)

かこちける…かこちけるほどに(デ・慶・刊)

右の本文は、大正本『いそぎ』の冒頭箇所である。この部分は他本と大きくは違わないものの細かな違いが確認できる。デンバー本・慶應本と、刊本系との間で細かく比較すると、大正本は刊本系に近い点が多い。ただし、大正大のみの本文も多く確認できた。また、デンバー本では、「あたらし殿となつけをきけり」とある後に、絵1が入り、*印「家の女房おもふやう」から次の詞書(詞書2)となっている。そして*印、大正本の詞書1の最後の文は、「明け暮れうらみかこちけるほどに、おとこ申しけるは」と、夫婦の会話が続く「詞書2」の内容となっている。大正本は、*の箇所は絵は入らず前後の詞書が続き、*の「明け暮れうらみかこちける。」で「詞書1」を結んでいる。物語が進むと、さらに異なる大きな箇所が出てくる。また上巻の後半から中巻・下巻へと、他本と異なる本文も確認できる。少し例を挙げてみる。

大正本では上巻最後の詞書4、本妻が部屋に押し入り新妻を襲う場面を、デンバー本など他本では次のように記す。

・もとの女はう是をきゝ、なをもはらやたきけむ、あらはらたちや、いてとつてゆかむといひて、あひのしやうしをはねやふり、(『デンバー本』)

・元の女房、これを聞き、なほも腹や立ちけん。「あら腹立ちや。いで、取つてゆかん」と言ひて、間の障子を跳ね破り、(慶応本)

・もとの女はう、これをきゝ、なをもはらたち、「あらはらたちや。いてく、とつてゆかん」といふまゝに、あひのしやうじをはねやふりて、(石川氏本)

新妻たちが磯崎の帰りを待ちわびるやりとりをしているのを聞いて腹が立った本妻が、「さあ、取つて行こう」と言つて、障子を蹴破つて部屋に押し入つていく場面である。本妻のこの言葉を、新全集の現代語訳では「よし、連れ去つて行こう」とするが、これではこの後、杖で打ち殺す内容に文意がつかない。この点、大正本では次のように記す。

・もとの女房これをきゝ、「あらはらたちや、いてく、おもひをしらせむ」とて、つえをおつ取、「うちころせん」といふまゝに、あひのしやうしをけやふりて、女はうのねやにつつととんていりければ、

腹の立つた本妻は、「さあさあ私の思いをわからせよう」ということで、杖を取り、「打ち殺そう」と言いながら、間の障子を蹴破り、新妻の寝屋に飛んで入つていったところ、という内容である。特に諸本の「取つてゆかん」では意味が通りにくいと、「思ひを知らせむ」だと意味が通る。

また、本妻が、鬼の面や赤頭、杖が外れなくなつたのを恥じて山に逃げたのを、息子が探しに行く場面に注目する。
・かくて、かの女房の御子に稚児一人侍り。日光山の稚児学生にて、隠れなくこそ聞こえ給ひけれ。(慶応本)

・この女はうの御子に、ちこ一人あり。につくはうさんのちこにて、かくもんしやにそかくれなし。(石川氏本)
諸本、大方このような内容であるが(『デンバー本は欠脱箇所)、大正本は少し違う。

・この女はうの子に、ちこ二人ありけるか、日くはうさんの一のかくしやうにて、かくれなきちゑしやにておはしますか、この事をきこしめし給ひ、

大正本では、息子は二人いて、二人とも日光山の稚児であり隠れ無き智恵者だというのである。ただし絵には一人しか描かれず、本文でも特段二人に役割はないようである。こうした他本との違いは、各所に見られる。

また中巻から下巻にかけて大きく異なり、特に下巻は構成から異なっている。大正本の場合、中巻ですでに磯崎殿は出家していて、下巻は、「昔の例」を挙げていく構成である。下巻は、安房国の壬生忠義の女房の話を挙げ（他本では、稚児が母を諭す場面为例として語られる）、一人の女の悪念が三人を成仏させること、女房のために家や身を失った男性の例、女人を成仏得脱させる血盆経の話とあり、道成寺説話で物語を結ぶ〔稿末・写真2参照〕。この終わり方について、臨川書店の『日本書古書目録』の解題では、「物語の末尾にあたる部分を欠く」と見なしている。大正本でも、各詞書の終わりを散らし書きにしていることを考えると、下巻の最後だけが通常の書き方で散らし書きではない点是不審であるが、下巻本文が最後も含めて石川氏本に近似していること¹⁴などから、こうした結末の構成をする伝本もあるという想定も可能なのではないかと考えている。

本文の比較検討や内容の分析については、さらなる詳細な精査が必要であり、改めて別稿を期したい。

四、大正本『いそざき』の絵についての比較検討

次に、絵の部分についてであるが、大正本は、全部で十面ある。絵の数としては、デンバー本の絵巻と同じであるが、その内容はかなり異なっている¹⁵。以下に、大正本とデンバー本と絵の比較を試みた。

〔表2〕大正本『いそぎ』とデンバー本との絵図対照表

	場面	大正本	デンバー本
1	磯崎殿と新しい妻	上巻絵1	○
2	磯崎殿が鎌倉に出立	上巻絵2	×
3	本妻が鬼の面を付けてのぞき見る	上巻絵3	○
4	本妻が新妻を打ち殺す	上巻絵4〔写真3〕	○
5	鬼姿の女房が、若い女房を踏む	×	○
	山中の本妻の鬼姿	中巻絵5〔写真4〕	○
	僧侶の姿	×	○
6	鬼姿の母をさとす息子の稚児	中巻絵6	○
7	母から鬼の面が取れる	中巻絵7〔写真5〕	○
	室内の磯崎殿と家臣たち	×	○
	出家した女房	×	○
8	山伏を追いかける女	下巻絵8〔写真6〕	×
9	僧侶と対面する蛇体の女	下巻絵9〔写真7〕	×
10	祈る僧侶	下巻絵10	×

右の表で、絵の細部の違いはあってもおおよそ絵の内容が一致するかどうかを○×で示した。表からわかるように、絵数は同じ十面でも、取り上げている場面が異なることが確認できる。また特に下巻の絵は、全く異なっている。これは大正本の下巻本文の内容構成が、他本と全く異なっていることと関係しているだろう。

注目したいのは「写真3」の本妻が新妻を打ち殺す場面である。デンバー本をはじめとする諸本が、①部屋に入り

杖を振り上げて叩き、恐怖を感じた女房達が逃げていく場面と、②本妻が新妻の髪をつかんで踏みつける場面が分けて書かれるのに対して、大正本は、①本妻が杖を振り上げて新妻を打ち、女房達が逃げて行くところと、②新妻の髪をつかんで踏みつける場面が一度に合わせて書かれている。

〔写真4〕は鬼の面の描かれ方が、他本と相違していることが確認できる。〔写真5〕は鬼の面、赤頭、杖が取れた場面であるが、〔写真4〕と比較すると、〔写真4〕は手まで鬼になっていたのが、〔写真5〕では母はすっかり人間の姿に戻っていることが確認できる。〔写真6〕と〔写真7〕は、下巻の絵を載せた。〔写真6〕の山伏を追いかける女の絵は、赤木本・東大国文本・天理本などに見られることは報告されているが、〔写真7〕の場合、これは恐らく、壬生忠義の妻と僧のやりとりの場面と思われるが、他本には見られない絵である。

以上のように、大正本は、本文にも絵にも独自の点があり、本文の内容・構成の面からも、大小の差異があり、物語の結び方も異なっている。こうした構成について、臨川書店の目録解題¹⁷⁾では、他の伝本を改編した異本とするが、大正本がより原態に近く、他本が物語を敷衍潤色して、現在のような内容を整えていったと考えることもできるのではないだろうか。いずれにしても絵の分析も、本文の精査と合わせて、今後さらに検討していきたいと考えている。

五、大正大学附属図書館所蔵『いそざき』の意義

最後に、『いそざき』の主題について述べておきたい。『いそざき』の主題については、様々に論じられてきたが、以下の四つの観点にまとめられる。

A 女の妄執、妬婦譚

B 鬼面（取れない面）

C 「後妻打ち」^{うわなぢ}

D 唱導、禪の法談、女人救済

それでは、一点ずつ、確認してみよう。Aの「女の妄執、妬婦譚」については、嫉妬の余り新妻を殺してしまいうに、女性には激しく恐ろしいまでの情念があるという観点から、『道成寺縁起絵巻』や『鉄輪』に類似するとして論じるものである。

次に、B「鬼面」についてであるが、これは猿楽師から面を借りる点に注目して論ずるものである。日光には猿楽師が行っていたこと、猿楽が鬼を演ずる職能を持つ人々であり、猿楽の面や装束は、変身する装置として機能していたことなどに注目し、本妻が鬼面を借りてかぶり、本人の意図を越えて本物の鬼となる点を指摘する。能楽研究の面から論じられることが多かった。¹⁸⁾

またさらに発展して、御伽草子研究の観点から、『酒吞童子』（伊吹山系）の話に、酒吞童子が京都の女子をさらうようになる前の話として、酒吞童子は鬼になる理由として、鬼の面をかぶって鬼になったとするモチーフに注目する論である。例えば、国上山で神楽を舞う稚児は、あまりにも美しく多くの女性から手紙をもらうが、悪童によって鬼の顔を描かれ、鬼になってしまった。あるいは叡山の稚児が風流の鬼踊りの際に付けた鬼面が取れなくなり、人を食べる本物の鬼になった、などという話をいながら考察する。

次に、C「後妻打ち」の問題である。これは例えば、『嫁威肉附面略縁起』¹⁹⁾や、『蓮如上人御教化 嫁威谷物語』²⁰⁾などには、姑が嫁をいじめる話に鬼面をかぶるという点に共通点が見られることや、この姑の嫁いじめが、浄土真宗の女人教化の説法として、日本海側に広がるモチーフとして広がることについて解析する論である。吉崎願慶寺をお参りする嫁を、面で威して邪魔をした姑の顔からその面が外れなくなるという話で、吉崎願慶寺の場合は、面を外し

た僧侶を蓮如として伝えている。また島根県の伝承では、永平寺のこととするなど、宗派を越え、地域を越えて広く伝播したモチーフであることが注目されている。²¹⁾

最後に、D「唱導、禪の法談、女人救済」についてである。これは、嫉妬する女性、妄執にとらわれた女性を、座禪によって救済する話という立場で論ずるものである。また『血盆経』が語られることなどともからめ、嫉妬に狂って殺してしまう女性が、最終的には懺悔し、発心出家することを結末とする点に注目するものである。²²⁾ 早く、高野辰之氏が「曹洞禪」の話だと指摘して以来、「禪宗的」という前提で論じられている論も多いが、諸論を見ると、「座禪」を理由に禪宗と述べているものも見られる。座禪は禪宗だけが行うものではなく、また「日光山の稚児」が重要な役割を果たしていることや、稚児の言葉に各宗への配慮も見られることを考えると、「禪宗」のみに限定して論ずることは避けるべきであろう。

日光山の稚児についてや女人救済への視点など、主題や内容の検討については、後日別稿に改めたい。

六、おわりに

『いそぎ』は、その内容の特異な点やモチーフの多様性から、様々な角度から研究されてきた。また伝本研究も詳細に尽くされてきた作品である。これまで絵巻はデンバー本が現存唯一のものであるという状況で研究が進められてきた。しかしこの度、大正大学附属図書館が、完存する『いそぎ』の絵巻上中下三巻を所蔵することが判明した。絵巻の伝本が出現したことも重要であり、絵や本文に諸伝本との相違が確認されることなど、『いそぎ』という作品を検討する上で、貴重な伝本であるといえるだろう。

本文も、大正本が他伝本よりも筋が通り整っていると判断できる箇所もあり、息子を二人とする独自の部分など、

大小様々な違いが確認できている。本稿は、内容の検討について論を尽くしていないが、まずは大正大学附属図書館所蔵の『いそざき』絵巻三巻について紹介し、諸伝本と比較した特徴を述べた。

今後はさらに内容を精査し、大正本の意義を検討するとともに、『いそざき』という物語の意義について、考察を深めていきたいと考えている。

註

- (1) 大正本は、外題も内題も「いそざき」と仮名表記するため、本稿においては、通行する漢字表記の『磯崎』ではなく『いそざき』に統一して記す。
- (2) 高野辰之「磯崎解題」(『国文学踏査』二、一九三三年六月)による。
- (3) 『いそざき』の研究は、藤井貞和「いそざき」(『国文学解釈と鑑賞』昭和五十六年十一月号、至文堂)、沢井耐三「お伽草子『磯崎』考——お伽草子と説教の世界——」(川口久雄編『古典の変容と新生』明治書院、一九八四年)、蓮如上人絵伝の研究(蓮如上人絵伝調査研究班編、東本願寺出版部、一九九四年)、佐谷眞木人『磯崎』(『国文学解釈と鑑賞』平成八年五月号(六一・五) 至文堂、一九九六年五月)などを参照した。
- (4) 『いそざき』の伝本研究としては、早くに、松本隆信『室町時代物語類現存本簡明目録』(『慶應義塾大学斯道文庫書誌叢刊之二』井上書房、一九六二年)があり四本が掲載された。また『室町時代物語集』四(井上書房、一九六二年)に、寛文七年の松会開版の版本の全文翻刻と、モノクロの一部挿絵が載り、横山重氏による①寛文七年刊、②天理図書館蔵奈良絵本二冊、③横山氏蔵奈良絵本一冊(修理の家で焼失)の三点の解説が載る。その後、若杉準治「デンバー美術館本「いそざき」絵巻について」(『説話論集』八(絵巻・室町物語と説話) 清文堂出版、一九九八年)では伝本十三本を挙げ、菅原正子「御伽草子「磯崎」の諸伝本と挿絵——猿楽の鬼の扮装——」(東京女子大学史学研究室『史論』五四、二〇〇一年三月)には、伝本九本および挿絵の比較が詳細に報告さ

れている。

(5)挿絵の研究としては、美濃部重克「御伽草子「いそざき」テキストの変容——絵巻から絵草紙へ——」（『中世伝承文学の諸相』、初出『伝承文学研究』二〇、一九七七年）、美濃部重克「室町物語の挿絵小考」（日本文学研究資料叢書『お伽草子』有精堂、一九八五年、初出は『南山国文論集』三、一九七八年二月）、若杉準治「デンバー美術館本「いそざき」絵巻について」（前掲註④）などを参照した。若杉氏は、デンバー本の絵を描いた絵師は、奈良絵本とは別系統の大和絵の本格的な絵師であると指摘している。

(6)デンバー美術館本は、『在外奈良絵本』（奈良絵本国際研究会議監修、角川書店、一九八一年）（デンバー本の全文翻刻、全文白黒写真版、絵二面カラー写真版と田中文雅の解説）を参照した。デンバー美術館はアメリカ合衆国・コロラド州デンバーにある美術館で、デンバー本は、海外に所在する日本の美術品という点で早くから注目されていた。一九七〇年にデンバー美術館が購入。平成七年度（一九九五年度）に在外日本古美術修復計画の一環で保存修理が実施され、この際、錯簡の補正も行われた。この修理は、文化庁美術工芸課の監督のもと、京都国立博物館文化財保存修理所内（株）墨申堂が実施した。修理後の寸法は、縦三二・六糎、全長、上巻七三六・四糎、下巻七二一・一糎とのことである。

(7)岩崎雅彦「猿楽の説話と鬼」（『能楽研究』二六、二〇〇二年三月）は、『日本書古書目録』八一（臨川書店、二〇〇二年一月）によって記す。この二〇〇二年の目録には、絵七面の写真が掲載されている。岩崎雅彦氏は、この目録掲載の写真から、本妻の付けた面について、「面は能面でなく、内側に曲がった牛の角様の角が二本生えた面で、牛頭をイメージしたものである」と諸伝本との違いを指摘し、また西行の歌として「世の中のをんなのこゝろすくならば むうじのつものやじやうぎならまし」と暁月坊（冷泉為守）の詠が引かれていることを述べている。また後に『和洋古書善本特選目録夏期特集号』一六（臨川書店、二〇〇八年六月）にも、絵五面の写真と共に掲載されている。

- (8) 伝本研究は、各先行研究（註④）を参照した。
- (9) 『在外奈良絵本』（註⑥）を参照した。
- (10) 『室町時代物語大成』補遺一に書誌と翻刻、『室町物語草子集』（『新編日本古典文学全集』小学館、二〇〇二年）に『磯崎』の翻刻と解説が載る。
- (11) 岡見弘「いそざき」（個人蔵奈良絵本）翻刻（『大阪成蹊女子短期大学研究紀要』二八、一九九二年三月）に絵図版翻刻が紹介された。
- (12) 石川透『『磯崎』翻刻』（『古典資料研究』五、二〇〇二年六月）、石川透『室町物語影印叢刊3 磯崎』（三弥井書店、二〇〇一年）に詳しい。
- (13) それぞれの本文は、デンバー本は『在外奈良絵本』を、慶應大学本は、『新編日本古典文学全集』を、寛文七年版本は、『室町時代物語集』四に所収されたものを用いた。
- (14) 他本と大きく隔たる下巻について、大正本は石川氏本と近似するが、道成寺説話で山伏が逃げ込む寺を、石川氏本が「かねまきてら」とするのに対して、大正本は「ひたかてら（日高寺）」とするなどの相違点も確認できる。
- (15) 『日本書古書目録』八一、二頁（前掲註⑦）による。また『和洋古書善本特選目録夏期特集号』一六、一〇頁（前掲註⑦）では、「本来の末尾とは異なる。」とする。
- (16) 絵画の比較は、菅原正子「御伽草子『磯崎』の諸伝本と挿絵―猿楽の鬼の扮装―」（『史論』五四、二〇〇一年三月）に詳しい。この論では、物語の舞台である日光山との関係を検討し、物語の成立を考える。連歌師宗長『東路のつと』に記される日光山の描写が『磯崎』に関係することや、日光山を訪れる猿楽師は多く、『磯崎』に登場する「くらいち大夫」は『東路のつと』の宮増源三の記述が影響したことを指摘、また『磯崎』の諸伝本を解説した上に、挿絵を比較して論じている。
- (17) 『和洋古書善本特選目録夏期特集号』一六（前掲註⑦）による。

(18) 能楽との関係では、岩崎雅彦氏(前掲註⑦)が、鬼と芸能の関係を論ずる中で、「御伽草子『磯崎』の猿楽」を論じ、『磯崎』の挿絵を詳細に分析し、室町期の能の演出を正確に反映していることを指摘した。また大谷節子「面に刻まれた能の歴史」(『能と狂言』九、二〇一一年四月)では、猿楽は、鬼面を所持し、鬼に扮する存在として認識されていたこと、鬼は、人間を懲らしめ畏怖させる側面と、この世に祝福を与える側面の両面を持つ点が指摘されている。

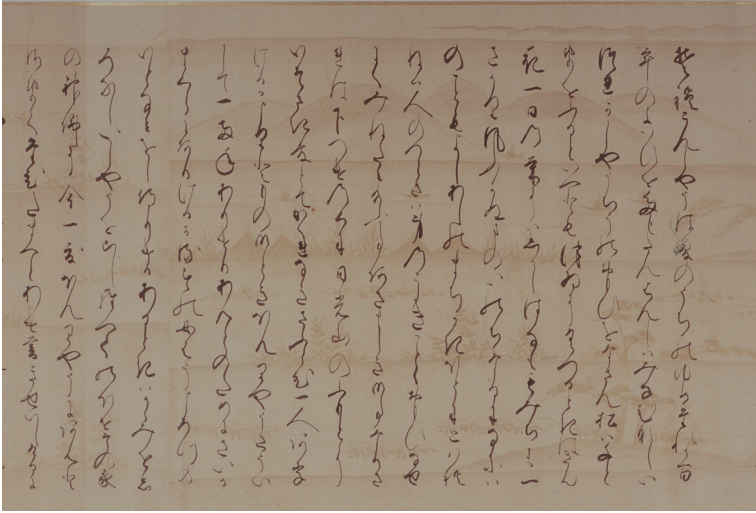
(19) 「嫁威肉附面略縁起」は『吉崎御坊願行寺文書』(清文堂出版、二〇〇五年)による。

(20) 『蓮如上人御教化』嫁威谷物語』は、膽吹覚『嫁威谷物語』の諸本と作者に関する考察」(『国語国文学』五一、二〇一二年)などに詳しい。明治二十一年永田長右衛門刊本は、国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧できる。

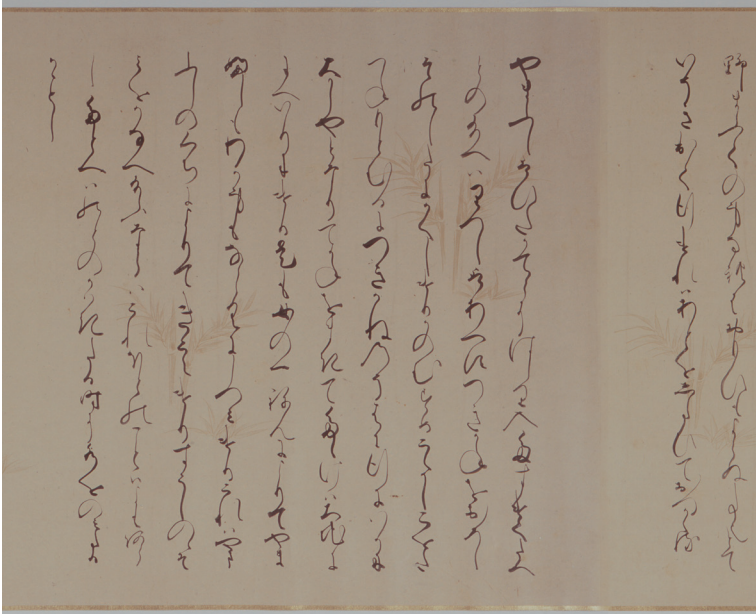
(21) 後妻打ちを、伝承より研究する論に、西座理恵「鬼面」に関する口頭伝承から考える「酒典童子」像——『伊吹山(大江山以前) 酒典童子』を中心に——」(『昔話伝説研究』三五、二〇一六年三月)や、同「磯崎」への一考察——肉付き面の昔話・伝説との関わりにおいて——」(『昔話伝説研究』三六、二〇一七年三月)、塚野晶子「諸国百物語」論——「後妻うち」を中心に——」(『昔話伝説研究』三五、二〇一六年三月)などがある。

(22) 唱導の面からは、堤邦彦「女人蛇体の文化変遷——唱導文芸から江戸怪談まで——」(『日本文学』五四・一〇、二〇〇五年一〇月)などに論じられている。

〔付記〕本稿の執筆にあたり、閲覧・掲載を許可して下さいました、大正大学附属図書館に心より御礼申し上げます。また本稿は、二〇二一年度大正大学学内学術研究発表会の発表をもとにしています。席上、御教示賜りました先生方に、深く感謝申し上げます。



〔写真1〕 卷上・詞書1冒頭



〔写真2〕 卷下・詞書3



〔写真3〕 卷上・絵4



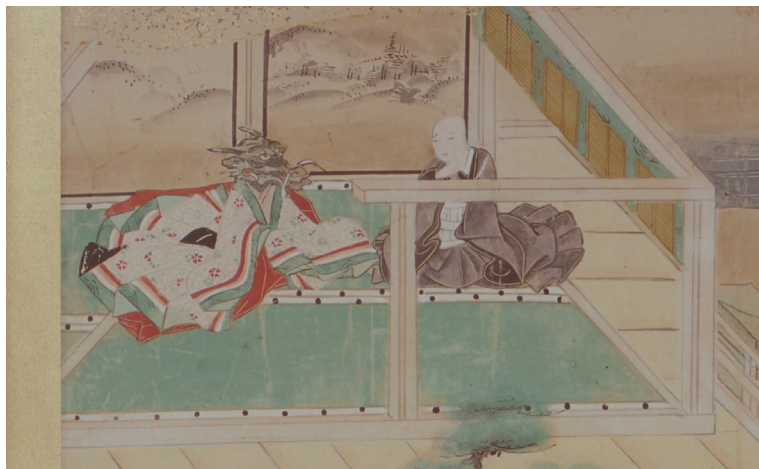
〔写真4〕 卷中・絵5



〔写真5〕 卷中・絵7



〔写真6〕 卷下・絵8



〔写真7〕 卷下・絵9